

【メルディア】一般財団法人メルディア広報誌

TAKE FREE

# MELDIA

VOL.52  
NOV.2022

## 小島慶子

今悩んでる人に伝えたい。「辛い、助けて」と声を出していいんだよ！

自分を責めずに、よく知ること。

病気や障がいの経験を通じて

「頼る」ことの大切さを知った

「栃木の伝統工芸品を守ろう！」と立ち上がったその想いが地元の活力に  
**就労継続支援A型事業所と日光下駄作者がコラボし  
人気商品開発へ**

あくまでもサポートに徹し、選手の持っている個性を引き出しているだけ  
**障がい者水泳練習会を通し、全国の障がいのある方にスポーツの場を提供したい**

**おさんぽDE楽しむ！**

～千葉県編・東京ドイツ村を散策しよう～

04 今悩んでる人に伝えたい。「辛い、助けて」と声を出していいんだよ！  
**自分を責めずに、よく知ること。病気や障がいの経験を通じて「頼る」ことの大切さを知った** 一語り 小島慶子

08 教育技術研究所の教材には、子どもを変える力がある  
**教育現場の「生の声」を受け止め、個性に対応した教材を提供**

09 新聞や雑誌などの紙媒体やラジオやWEB等、多彩なメディアから注目  
**障がいがありながらも創作活動を続ける人々たちと社会をつなぐ仕組み作りへ**

10 あくまでもサポートに徹し、選手の持っている個性を引き出しているだけ  
**障がい者水泳練習会を通し、全国の障がいのある方にスポーツの場を提供したい**

12 「栃木の伝統工芸品を守ろう！」と立ち上がったその思いが地元の活力に  
**就労継続支援A型事業所と日光下駄作者がコラボし人気商品開発へ**

16 人と人が支え合う尊さが大切。「水越けいこ」が語ります  
**水越けいこ M Size はじまり Again**

18 障がい者を応援、支援企業紹介  
**企業探訪**  
 社会福祉法人 翔の会 ちがさきの木魂 茅ヶ崎ベーカリー

20 気になる絵本屋さん VOL.4  
**大人のためのワークショップ  
オリジナル絵本作り**

22 **おさんぽDE楽しむ!**  
 ～千葉県編・東京ドイツ村を散策しよう～

24 漫画エッセイ  
**うちの子、へん?**  
**【発達障害・知的障害の子と生きる】**

28 MELDIAつなぐ

30 読者プレゼント



### 松元伸乃介

1989年4月18日生まれ。石川県金沢市在住の天才イラストレーター。人と話すことが少し苦手で、絵を通してみんなと会話をします。とくに動物の絵を描くのが得意で、絵には伸乃介さんの気持ちが込められています。3歳のとき、重度の知的障がいと自閉症の傾向が強いと告げられました。幼稚園のときから動物の絵にこだわりはじめ、これまで書きためた絵は3,000点以上のほりまします。カラフルで細かいタッチの絵がとても特徴的。また、人間を描くときもなぜか動物で描き、個展などで描く「似顔絵会」は、絶大な人気を得ています。



<https://www.tvkanazawa.co.jp/shinnosuke/>

僕には人間がいろいろな動物に見えるんだよ！  
 絵を描く時は、いつも筆ペンで輪郭を描き、主に1本300円近くするイラストレーター用のカラーペンで色をつけていきます。その種類はなんと300色近くもあるとか。すべて画材屋で伸乃介さんが自分で選んでいます。そのカラーペンを自在に操って、生き生きとした動物の絵が生まれているのです。ちなみに、ペンのインクの交換は、母・聖子さんの仕事だそう。



**松元伸乃介活動報告** <5/27~6/1 金沢市内で個展を開催！>



今年の5/27(金)~6/1(水)までの6日間、金沢市内のグリーン・アーツギャラリーにて個展(入場無料)(主催・Love & Kiss 協賛・Elle Club Art 後援・北國新聞社/MRO北陸放送/エフエム石川)が開催されました。市内の多くの方が来場し全日大盛況でした。また、個展中に開催された「似顔絵イベント」も大好評！全日10:00~16:00と長時間にも関わらず、「自分がどんな動物に見えるのか、伸乃介さんに描いてもらいたい」と多くの人々が来場。松元伸乃介さんは、迷いなくわずか数分でその方のイメージを動物に表現します。表情を見ているのか、伸乃介さんだけに見える心のなかを見ているのか……。どうして動物を描くようになったのか、その理由はお母さんもわからないそうです。

**松元伸乃介グッズ紹介**  
 ネットからも購入可！ <https://love-and-kiss.fun/cooperation/detail/shinnosukegoods.html>



ぬりえ  
 松元伸乃介デザインの「愉快な動物たち」をぬりえにした商品です。

シール  
 ファンから「ぜひ作ってほしい」との願いから生まれた商品。松元伸乃介デザイン 人気動物シール2枚入り

今悩んでる人に伝えたい。「辛い、助けて」と声を出していいんだよ！

# 自分を責めずに、よく知ることで 病気や障がいの経験を通じて 「頼る」ことの大切さを知った

語り小島慶子



当時は認知されていなかった  
発達障害という言葉

私は1972年に父の転勤先のオー  
ストラリアで生まれました。姉がひとり  
います。母は言葉遣いに厳しく、話し言  
葉で「くだよ」というお友だちとは付き  
合ってはいけないと言われたことも。当  
時は女の子は女らしくという価値観が  
今よりも強かったので、良かれと思っ  
てのことだったのでしよう。

当時から私は、落ち着きがなく人見知  
りで、大人が喜ぶ子供らしいリアクショ  
ンをしなかったため、不機嫌で愛想のな  
い子どもだと思われることが多かった  
ように思います。また、面白そうなこと



を見つけると、後先考えずにそっちに  
いつてしまったり、不用意な発言で友達  
を傷つけてしまったり。ですから、仲間  
はずれにされることもありましたね。

私が子どもだった1970年代から  
80年代当時は、まだ発達障害という言葉  
はほとんど知られていなかったもので、と  
にかく困った子どもだと、両親にも周り  
にも思われていたと思います。

「なんで普通にできないの？」  
母の言葉に悩む

私が3歳の時に一家は日本に帰国。小  
学生の時にはシンガポールや香港でも  
暮らしました。転校でいじめを受けたこ  
とも。しかし中学時代も、仲良くなりた  
い一心で笑いを取るために、お友だちが  
トイレに入っているときに、上からトイ  
レットペーパーを投げ入れてみたり、友  
だちの教科書に落書きをしてみたり、嬉  
しくなって、友だちに体当たりしたら嫌  
われてしまったり……。周りから見れば  
突拍子もない行動を起こすことが多く、  
「なぜ、どうしてこうなっちゃうの??」  
と自分では理由がわかりませんでした。

中学1年の1学期が終わる頃には先  
生に呼び出されて「ブラックリスト入り  
です」と宣告されました。母からも「なん  
で普通にできないの?」とよく言われま  
した。その度に、「普通ってなんだろう  
?」と悩みました。自分の思いをうま



く言葉にできず「ひねくれている」と言  
われてしまい、もどかしさを怒りに変え  
るといふ悪循環だったように思います。

おそらく、幼い頃に受けたいじめは空  
気が読めなかったからだけでなく、転校  
生だったことや、同級生よりかなり背が  
高かったことなど、複合的な要因による  
ものでしょう。

ただやがて、「思いついたこと  
をそのまま言っただけじゃない  
らしい」と思うようになり、  
同級生とうまくやっていく  
ための工夫を、自分なりに  
見つけようと考えたのです。

自分を変えようとした高校時代。  
最初の1カ月が転機に

中学から大学までは私立の一貫校に  
通いました。中学の時はとにかく周りの  
みんなが眩しく見えたんです。お金持  
ちで、可愛くておしゃべりで成績も性格もい  
い、そんな子たちが羨ましかったんです  
ね。先述のように先生にも叱られてはか  
りでもそのうち、不貞腐れるのに疲  
れてしまいました。

そこで、高校に進級したら自分を変え  
ようと決心。人気者の同級生の振る舞  
い方を観察しました。いわば「型」の学習  
ですね。そして高校に進学した際に、ま  
ずは大人しい子を演じてみたくて。喋  
りすぎず、ニコニコ。それを1カ月も続  
けてみると、中学で3年間一緒に過ごし  
た同級生たちが「慶子ちゃんて大人しい  
よね」と言っただけです。こんなに簡単  
に人の印象が変わるんだと驚きでし  
た。学習した型をいろいろ試して1年ほ  
どしたら、自然に  
振る舞って





大人になってADHDが判明。傾向を知り対策ができるように

大学卒業後には、放送局のアナウンサーという道に進みました。私の世代は人数が多く、当時はいわゆる「女子アナ」ブームでもあったので、競争率は1000倍ほど。運よくTBSに採用され、入社早々、テレビやラジオで忙しい日々を送っていました。

しかし若い女性アナウンサーには、空気を読んで好感度の高い女性を演じることが求められていました。私が最も苦手とすることです。さらに、人に見られて容姿をあれこれ言われることにも疲れ、自分を責めるように。学生時代から摂食障害の過食嘔吐に苦しんでいたのですが、それがさらに悪化しました。

給料をほぼ食費にあて、食べては吐いての繰り返し。「なぜ、求められる、普通の振る舞いが上手にできないのか。なぜ、他の人には簡単にできることが自分にはできないのか」と自分を追いつめてしまっていたと思います。本当にその当時は辛かったですね。

そして縁あって28歳で結婚。30歳で長男を、33歳で次男を産みましたが、「母のように過干渉になつたらどうしよう」と、子どもとの距離の取り方に悩み、大病院の育児相談室でカウンセリングを受け始めました。

やがて33歳の時に、夫との関係に悩んで不安障害という精神疾患を発症。投薬とカウンセリングで半年ほどで症状は落ち着きましたが、その後も精神科医のカウンセリングに通い、寛解するまでには10年近い時間がかかりました。その過程で、41歳の頃に主治医から軽度のADHDと診断されました。自分の長年の困りごとや不得意なことは心がけや性格のせいではなく脳の機能障害の影響があったのだと知り、自分に対する理解が深まりました。

診断を聞いたときの率直な感想は、「なんだ、早く知っていればもっと自分の扱い方がわかったのに」でした。原因が明確になったことで、霧が晴れたような気がしました。何かと悪目立ちしてしまっただけの自分が少しわかり、受け入れることができたのです。

そこからは、脳の特性を知って、工夫をすることを心がけました。同じ障がいを持つ人がしている、さまざまな工夫を参考にしながら、脳の特性ゆえのミスを事前に防ぐための自分なりのやり方を



でも友達とうまくいくようになりました。

中学入学後に劣等感に苦しんだことで「変えられないことを悩んでも、不毛だな。それよりも、自分の工夫で変えられることを探して注力した方がいい」と気づいて、発想の切り替えができたように思います。

大学時代は、出版社などでアルバイトをし、ゼミではディベートを学びました。ディベートの勉強を通して、同じ事実でもさまざまな違う捉え方ができることを実感しました。

学生時代はいろいろな大人と接して視野を広げ、物事の見方にも幅があることを知り、たくさんの気づきを得ることができました。

模索するようにしています。

子どもたちと夫はオーストラリアに。違いに寛容でオープンな社会

2014年から、夫と息子たちはオーストラリアで生活しています。移民の国ですから、さまざまな違いのある人が暮らしています。そのため、同質性の高い日本よりは人との違いに寛容で、オープンな社会だと感じます。

発達障害についても、日本よりは支援が整っているように思います。例えば中

学や高校では発達障害のある子どもにはテストの解答時間が、15分多く与えられます。誰もそれに文句は言いません。大学ではADHDのある人には課題の提出期間を長めに設定するなどの支援があります。日本よりも発達障害について大らかに語られている印象です。

障がいに限らず、人は誰しも困りごとを抱えることがありますよね。周囲の人との違いに悩むこともあるでしょう。息子たちには「人生には色々なことがあるけど、辛い時や困った時には抱えこまずに、いろんな人に相談するんだよ」頼れ



る場所や人を複数持つことが大事だよ」と話しています。

全て自力救済なんて無理ですよね。専門家の知恵を借りたり、信頼できる人に話を聞いてもらうのはとても大事なことです。誰でも助けを求めやすい、開かれた社会であってほしいです。

生きづらさの理由はさまざまです。精神疾患で苦しむ人もいれば、発達障害で困っている人もいます。その両方で辛い思いをすることもあるでしょう。メンタルの病気や発達障害に対する偏見はまだ根強いですが、日本でも精神科医や臨床心理士をもっと気軽に受診できるようなになるといいですね。私も専門家の先

生方にとっても助けられました。今も感謝しています。うんと苦しくなるまで我慢せずに早めに相談できれば、生きづらさを軽減するヒントが見つかるかもしれません。

同じしんどさを持つ仲間とつながることも助けになるでしょう。人との違いをあげつらい責める社会ではなく、違いを尊重して労わりあう社会にしていきたいですね。

新刊

小島慶子著 (PHP新書)  
「おっさん社会が生きづらい」  
税込価格:1,188円

著者が、5人の識者と日本社会の生きづらさについて語り合う。「誰も抱える内なる“おっさん性”を肥大化させる社会」とは？

3名様 PRESENT

小島慶子著書  
サイン入り

詳しくは30ページ

小島慶子(エッセイスト・タレント)

1972年 オーストラリア生まれ。  
学習院大学法学部政治学科卒業後、1995年にTBSに入社。  
アナウンサーとしてテレビ、ラジオに出演する。1999年 第36回ギャラクシーDJパーソナリティー賞を受賞。2010年に退社後は各種メディア出演のほか、執筆・講演活動を精力的に行っている。「AERA」「VERY」「日経 ARIA」「講談社mi-mollet」など連載多数。  
2014年より、オーストラリア・パースに教育移住。夫と二人の息子はオーストラリアで生活し、自身は日本に仕事のベースを置いて、日豪を行き来している。2017年より東京大学大学院情報学環客員研究員(MeDi)  
現在、文化放送「大竹まことのゴールデンラジオ」の火曜レギュラーを務める。  
新刊「おっさん社会が生きづらい」(PHP新書)





# 教育技術研究所の教材には、子どもを変える力がある

## 教育現場の「生の声」を受け止め、個性に対応した教材を提供

「ふみおくん」があると  
落ち着いて授業が受けられる

一説には、海外と比べると、日本の学校での特別支援教育は20年〜30年も遅れているといわれています。

とくに発達障がいに関しては、研究も進みどりのような支援や教育方法がふさわしいかエビデンスもそろってきていますが、教育現場に反映されない場合が多いそうです。

株式会社教育技術研究所では、教育現場の声に耳を傾け、時代に対応した教材

を提供し続けています。今回は多くの商品のなかから、大反響を呼んでいるセンサリーツール『ふみおくん』の開発に、特別支援教育現場の視点から携わった、小嶋悠紀先生（長野県公立小学校教諭）にお話を伺いました。

（小嶋先生）発達障がいがある子どものなかには、落ち着くことが苦手な子が多いです。日本の教育は、体が動いてしまいう子どもに対して「我慢」を求めます。しかしアメリカでは、衝動を受け入れ、動きやすいように「配慮」する教育方法をとっています。

アメリカで特別支援教育を知る機会があり、そのときセンサリーツールの普及を目の当たりにし、とても刺激を受けました。センサリーツールとは、子どもが求める感覚刺激を与えることで、さまざまな行動調整をサポートする感覚刺激教具のことを指します。

帰国後「日本でもセンサリーツールを作り普及させたい」と思い立ち、製造元の新潟県三条市にあるセンサリーツール研究所 大橋清二氏と共に、開発に着手しました。

「ふみおくん」の試作品を作り、保護者に「モニターになって、率直な意見が欲しい」と呼びかけたところ、多くの児童が協力してくれました。

児童には試作品を学校と家庭で使ってもらい、感想を聞きながら強度や柔らかさなど、改良を重ねていきました。

椅子や机の脚に取り付けた「ふみおくん」を踏むことで得られる感覚刺激に、児童から「気持ちいい」「集中できる」「安心する」といった声が多く聞かれるようになりました。そして完成したのがセンサリーツール『ふみおくん』です。

家庭や学校で子どもに「配慮」する選択肢をふやしていくことは、その子の最善のケアにつながっていきます。センサリーツールの普及もそのひとつと捉え、多くの人に知ってもらいたいです。



小嶋悠紀先生

教育技術研究所  
(TOSSオリジナル教材)  
<https://www.tiotoss.jp>  
TEL:0120-00-6564  
FAX:0120-88-2384

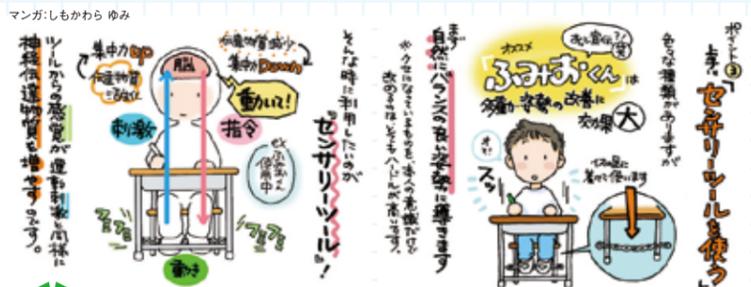


### 椅子・机への取り付け方



椅子の脚からはみでた余分な部分は安全のため、ハサミで切ってください。

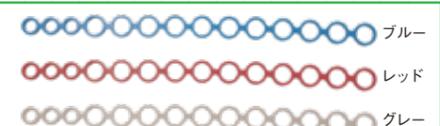
机の脚への装着にはカラビナなどをご使用ください。



各1名様 PRESENT

詳しくは30ページ

センサリーツール『ふみおくん』  
ブルー、レッド、グレー各1本



新聞や雑誌などの紙媒体や  
ラジオやWEB等、  
多彩なメディアから注目

## 障がいがありながらも 創作活動続ける 人々たちと社会を つなぐ仕組み作りへ

積極的に商品や企画を提案し、  
経済的・精神的自立支援を応援

障がい者アート協会では、障がいがありながらも創作活動続ける人々が、もっと気軽に、自由に「自分の作品を発表できる場所」を提供したいと、日々活動をしています。

現在、作品を制作、発表しても経済的  
対価を得ることはなかなか難しいのが

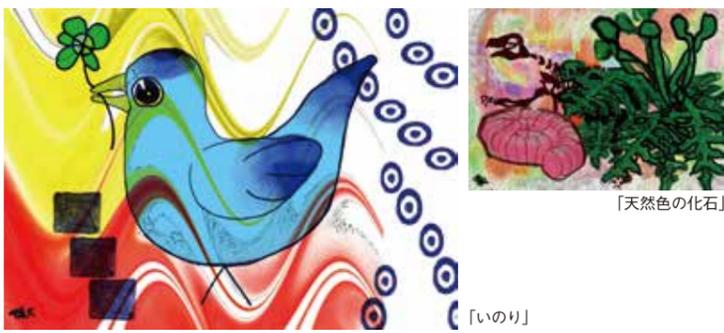
現状です。経済的・精神的自立支援のため、同協会では、ギャラリースایت「アートの輪」を運営しています。毎日更新するSNSをはじめ、各種メディア、営業活動を通じて、障がいのある方が生み出すアートの魅力を多くの人々に向け発信し続けています。

また、CSR・SDGsに取り組みたい法人には、商品の提案や、ノベルティグッズの企画等、積極的に提案していま

す。

今後は、全国のコンビニエンスストアのコピー機で買える障がい者アートポストカード・シート「eプリントサービス」などを企画しているそう。今後の協会の動きに注目ですね。

一般社団法人  
障がい者アート協会  
障がい者アート協会 公式web  
<https://www.borderlessart.or.jp>



「天然色の化石」

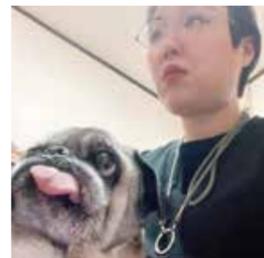
「いのり」

奥村さん

私は下垂体機能低下症という難病と広汎性(こうはんせい)発達障がいがあります。人と感じるポイントが違い、興味や関心ごとが周囲のお友だちと合わないと感じつつ、なんとなく辻褄を合わせていました。成長するにつれ、自分でも違和感を感じ、21歳のときに障がいわかりました。

幼少期から絵を描くことが好きで、仕事につながればという思いで、障がい者のクラウドソーシングに登録。すると、エージェントから「マンガ描けますか?」と訊かれたことがきっかけでお仕事が決定し、webメディア等を中心に在宅でマンガを描く仕事に従事しています。

今回の『いのり』『天然色の化石』のなかでも『いのり』は、人間は意見の違いからケンカ等の争いごとを引き起こすことが多いことから、「動物の心のように素直になって仲良くなればいいのに」という思いと、みんなの幸せを鳥が運んでくれますようにと、祈る気持ちで描きました。私にとってアートは自分の魂を表現できるツールです。今後も想いを乗せて描き続けたいと思っています。



「命の目」

「光の輪の中へ」

naomiさん

介護福祉士として17年働いていました。昔から感情の振幅が人より大きく、周り比べると感覚が違っていると感じていました。ある日職場の同僚から、「病院へ行ってみたら?」と勧められ受診したところ、双極性障がいと診断されました。今は、自分の過去を振り返り納得することが多く、逆に心が楽になったように感じています。

絵を描くようになったきっかけは、パステルアートインストラクターとの出会いです。ほんわかとした優しい色合いを見て、「周りも自分も幸せになるかも!」と直感し、すぐにパステルアートの技法を学びました。そして4年前、縁あって障がい者アートに触れる機会を得たことで、アート協会の活動を知り「ここなら、自分の居場所がありそう」と登録しました。

主婦と並行し、アート協会様に作品を投稿しています。県内の障がい者芸術文化支援センターのアトリエにて創作活動をしています。生きづらさもありますが、アートを通して社会とつながれることを嬉しく思います。

作品の中の『光の輪の中へ』は、紆余曲折それぞれ進む道はあるけれど、明るい方向へ行けるようにというイメージで描いたものです。



あくまでもサポートに徹し、  
選手の持っている個性を引き出しているだけ

# 障がい者水泳練習会を通し、 全国の障がいのある方に スポーツの場を提供したい

練習場所がないなら作るしかない。  
思いの実現に向けた第一歩

(有)仁スポーツクラブ代表取締役の榎本仁さんは、2017年から「障がい者向けの水泳練習会」を始めました。きっかけは、榎本さんが学生時代のときから感じていた思いが原点でした。

学生時代、榎本さんは縁あって障がいのある子どもたちの水泳指導をしていました。落ち着かない子どもたちを見て、会費を払って水泳を習いに来ているのだから、なんとか練習してもらいたいという思いが強く、子どもたちの本当の心を理解することが難しいと感じたことがあったそうです。



力のもと、「障がいのある方にもスポーツの場を提供したい」という思いの実現に向けて、一歩踏み出すことができたのです。

学生時代から競泳指導にのめり込んでいた榎本さんは、本格的にセントラルスポーツで指導育成方法を学びました。そうして、生徒さんの「やる気」を重視した、特有のコーチングスタイルを確立させていきました。

その後、以前から脳裏の片隅に眠っていた、障がいのある子どもたちの練習場所をもっとふやそうと、榎本さん自ら練習できるスポーツクラブやスイミングクラブを探し交渉、現在は千葉県国際水

泳場のほか、同県松戸市馬橋のクラブにも協力してもらい、障がいのある多くの子どもたちが練習に励んでいます。

## 「やる気」をどう引き出すか。 競泳を教える難しさに直面

「指導者として、考え方は絶対ブレないことが大切」と思い指導を続けてきた榎本さんでしたが、障がいのある子どもたちの指導方法を定着させるまでは試行錯誤の連続でした。

例えば、やる気を引き出すために「いいね！」と誉めても、内容をすぐ忘れてしまったり、集中力が続かなくなってしまう。注意すると、体が固くなりいパフォーマンズができない。頑張らせるにはどうしたらいいのか、随分悩んだと榎本さんは語ります。

水泳練習会に参加している子どもたちをよく観察してみると、榎本さんの注意する言葉は上の空でも、家族の一員である母親がいう言葉は、しっかりと受け入れる傾向が見受けられたそう。そんな親子の姿を通して「子どもたちの環境や、生活等も理解する努力をしなければいけない」と、気付きがあったそうです。そこで、水泳練習会に子どもたちの母親にも参加してもらい、三位一体となってサポートしていく練習方法を両親に提案したところ、「子どもと同じ体験ができるなんて、とても嬉しいです！」と



そこで、優しく抱っこして水のなか  
に練り返し触れ合うように  
したり、走り回って飛び込むことがいかに危険なことか、練り返し伝えたり。  
ルールを守りながら、「水のなかで自由に動いて楽しいんだよ」と根気よく伝えることで、子どもたちと心の距離も縮まり、信頼関係が生まれました。  
すると、榎本さんの思いに込めるかのように、今まで泳げなかった子どもたちもだんだんと泳げるようになり、「水泳が楽しい！」と笑顔で練習する姿を見て、やりがいを感じたそうです。  
大学を卒業後、本格的に競泳指導に



快諾。このことがきっかけで、三位一体の指導方法へと変わっていったのです。

## さらなる夢は、障がい者と健常者が 一緒に練習できるような環境を作ること

母親たちの協力を得た榎本さんが最初に取り組んだことは、自分が注意するのではなく「笑う」ことに切り替えたことでした。たとえ伝えた内容を忘れてしまっても、集中力が続かなくても笑って見守り、一緒にいる母親が、子どもに理解できるように噛み砕いて説明をする。この方法を練り返していくうちに、子どもたちの感情が落ち着くようになり、練習に集中できるようになりました。

専念。国内はもとより、海外にも渡り競泳選手を指導、日本代表選手や、オリンピック選手を多く育成し、更に経験を重ねていきました。  
帰国後、競泳を習いたくても障がいのある子どもたちが練習できる環境が少ない現状を知り、「なんとか練習場所を確保してあげたい」と考えた榎本さん。  
しかし、公共施設での練習もなかなか難しいし、民間スポーツクラブは敷居が高い。そうしたなか、榎本さんの思いに賛同したセントラルスポーツ(株)の協

時間(とき)が経ち、子どもたちとの信頼関係ができあがるにつれ、「あの子は今日機嫌が悪いな」と感じれば、あえて距離をとり子どもが気づくまで放っておくようにしたそうです。すると、親に教えてもらわなくても、徐々に子ども自身が気づき改善、プラスの方向へ変わっていきました。

また、どんなことがあってもネガティブ思考にならず、親たちの話をしっかりと聞く。どうすればタイムが上がるのか、試合に勝つことができるのか喚起することで、その子のやる気が自然に湧き出せるような指導を心がけているそうです。

今後の榎本さんの思いは、試行錯誤を繰り返しながら、健常者と一緒に競泳に打ち込める環境を作ること。「そんな素晴らしい環境を早く実現できるように、周りの方にも理解を深めてもらいたい」と笑顔で語ってくれました。



有限会社 仁スポーツクラブ  
代表取締役 榎本仁  
1961年生まれ  
学生時代より水泳指導にのめり込み、コーチとしての喜びを感じる。その後セントラルスポーツ(株)において指導育成方法を学び、競技水泳の世界では数々のオリンピック出場級の選手育成にも貢献している。



日光下駄みやび・アトリエギャラリーみやび 渡邊 誠友(わたなべ せいゆう)さん

やさないためにもとりあえずチャレンジしてみよう」と、軽い気持ちで始めたそうです。

下駄の上に縫い付ける草履を作る作業は、竹の皮を使い一つひとつ丁寧に編み込んでいく地道な作業です。師匠に手取り足取り教えてもらいながら作業をしても、最初は編み込みが均一にならず、解いては編み、解いては編みの繰り返しでした。

また、同じように作っているつもりでも、イメージ通りに仕上がるときもあれば、そうで無い時もあり、「その時々の上上がり加減や過程を見るのがとても楽しく感じ、気がついたら日光下駄作りにハマってしまった(笑)」そうです。

また、一度決めたらとことん突き詰める渡邊さんは、自然な仕上がりを目指したいと、全ての工程を手作業でおこなっています。そのこだわりは草履素材にも及び、黒い斑点が少ない九州の天然タケノコ皮を使用することで、見た目も美しく、素材で優しいタケノコ皮の色が出るように工夫もなされています。



そして、下駄の台木には軽さをだすため腐食に強く、軽くて柔らかい桐が使われており、とても履き心地がよく長時間歩いても疲れにくいのだそう。タケノコ皮で編んだ草履に、自分で燃焼して作った麻紐を草履が剥がれないように下駄台に上手く縫い付けて日光下駄はできあがります。

タケノコの皮を使用した草履は、夏は涼しく冬は暖かく、吸水性と保湿性をもち合わせていることから、年間を通して履くことができるため、地元のみならず遠方からもお客様が買い求めに来るそうです。



## 「栃木の伝統工芸品を守ろう!」と立ち上がったその思いが地元の活力に 就労継続支援A型事業所と 日光下駄作者がコラボし 人気商品開発へ

奥深さにハマり最年少の職人として受け継ぐ決意へ

日光下駄の歴史は江戸時代まで遡り、神官や僧侶が社寺に入る際に、格式を重んじて草履を使用することが原則とされてきました。

しかし、土地柄坂道が多く、雪深い日光で草履では歩きづらいため、下駄を合わせた製品が考案されたのが日光下駄の始まりといわれています。

明治以降、実用的に改良、普及していったのですが、下駄文化の衰退とともに職人も減り、衰退の一途を辿ってしまいました。

美術系の専門学校を卒業した渡邊さんが日光下駄を知ったのは、母親がきっかけだったそうです。私の母親は着物の着付けの先生をしていたこともあり、和物をとっても好んで身につけていました」と渡邊さんは語ります。

母親が着物に合う日光下駄を探していたところ、のちの渡邊さんの師匠の下駄が目にとまり購入。そのとき、伝統工芸品のひとつである日光下駄の後継者が不足しているというを知り、渡邊さんの母親が後の師匠に「うちの息子どうかしら?」という言葉がきっかけで、職人の道を歩むことに。

その当時、渡邊さんも「自分がどこまでできるかわからないが、伝統工芸を絶

意外な出会いから、  
ごきん刺し日光下駄が誕生

そんな地道な渡邊さんの活動が、就労継続支援事業を展開しているCWRらば宇都宮・就労支援A型事業所の管理者・菊地さんの目に留まることに。

菊地さんの母親が地元日光市出身で、日光下駄にとっても興味があり、渡邊さんの母親同様、職人が減っていることをとても危惧していたそうです。そこからヒントを得て、CWRらば宇都宮で製作している、青森県津軽地方の伝統工芸「ごきん刺し」と日光下駄のコラボ商品を作って





みませんか?と声をかけたのがきっかけでした。

CWらぼ宇都宮は利用者さんの賃金増に、一方渡邊さんは、日光下駄の普及と後継者育成へ、「お互いがwin-winの関係になれるなら面白いかもしれない」と感じたそうです。

しかし、ひとつ懸念があったのは、事業所で製作している「こぎん刺し」のクオリティーでした。

早速、菊地さんが「こぎん刺し」のブローチや名刺入れのサンプルを届けたところ、クオリティーの高さに驚き二つ返事でコラボが決定したそう。菊地さんと渡邊さんが一緒に考え、何度も打ち合わせ

せを重ね、「日光下駄の鼻緒の部分をこぎん刺しにすれば、カジュアルな商品ができあがるかもしれない」とアイデアを出し合い、オリジナル日光下駄ができあがりました。

オリジナル日光下駄は地元で開催された催事でも大反響を呼び、地元の新聞やメディアで取り上げられるまでに成長。「自分の作った日光下駄の価値が上がり、認知度が上がったのもCWらぼ宇都宮で働く皆さんのおかげですね」と、目を細めて笑う渡邊さんの笑顔が印象的でした。

日光下駄みやび・アトリエキャラクターみやび

不足を知ったことが出発点でした。「なんとか伝統工芸品に新しい風を吹かせることはできないか」と思い、日光下駄みやびの渡邊さんを直接訪ねて直談判。事業所で製作している「こぎん刺し」の高い技術を渡邊さんが見て快諾、共同開発にこぎつきました。

**何よりも楽しい！  
と思える仕事を**

「こぎん刺し」とは、青森県津軽地方の伝統工芸です。その技術を指導員が時間をかけて丁寧に教え、名刺入れやくるみボタン等を製作していました。日光下駄



株式会社マーベリック CWらぼ宇都宮  
管理者・サービス管理責任者 菊地恵さん

との共同開発が決まってから、現代の日常に取り入れやすいデザインと、海外の方にも買ってもらいたいという思いを込めて、ジーンズにも合う日光下駄を作りたいと、渡邊さんと話し合い考案したそうです。

そこで、日本らしい「春雷」がかり藤「白銀」など、季節を入れ、そのイメージに合ったデザイン13種類を製作しました。

やがてその取り組みは、地元紙にも取り上げられ、市内のマルシェに出店したり、商業施設にも出店できるようになりました。事業所の目玉商品へと進化してきました。並行して、Instagram

やショップのHPにも日光下駄を掲載したところ、「障がいがある息子を育てています。同じ親として応援したい」と購入してくださるファンもふえたそうです。

そして何よりも、通所している利用者の皆さんが、働くことへの喜びを感じ、明るくイキイキと仕事に従事している姿が一番嬉しいと菊地さんの顔もほころびます。

日光下駄を皮切りに、評判が評判を呼び、地元宇都宮の八坂神輿奉賛会からは、「お祭りを使うオリジナル巾着を作って欲しい」と依頼が舞い込んできました。せっかく作るのなら巾着につける

根付を市内の工芸店に頼めないかと考え相談し、栃木県伝統工芸士(指物)とコラボレーションし、新しい商品を生み出すことにも成功しました。

現在は、栃木の伝統工芸品宮染めと「こぎん刺し」をあしらったスマホホルダーも製作。老舗の着物屋さんにも置かせてもらい、ここからさらに事業展開する予定だとか。「利用者の皆さんも、楽しんで作業をしてきています。賃金の向上、雇用創成ができることを目指して、伝統工芸をたやさぬよう頑張っていきたいと思えます」と、素敵な笑顔で菊地さんは語ります。

各1名様 PRESENT

- ① こぎん刺し名刺入れ
- ② こぎん刺しヘアゴム
- ③ こぎん刺し丸ブローチ

詳しくは30ページ

**CWらぼ宇都宮 就労継続支援A型事業所**

**~誰もが働ける楽しい未来~を実現に!  
刺繍を施した自社製品  
こぎん刺しで、伝統工芸品に  
新しい風を吹き込む**



**東北地方の伝統工芸品  
「こぎん刺し」を取り入れた  
商品が続々と誕生**

CWらぼは、企業(Company.カンパニー)と福祉(Welfare.ウエルフェア)が共に補い合い、いい形で共存するために常に研究(Laboratory.ラボラトリー)していく事業所を目指して活動しています。

もともと就労継続支援事業を展開している(株)マーベリックでは、東北地方の伝統工芸品「こぎん刺し」を取り入れ、現代のデザインにマッチするよう、さまざまな商品を開発しています。

CWらぼ宇都宮は、昨年(2021年)7月に開所したばかり。精神障がいや知的障がい、発達障がいの方等、現在約20名の利用者さんがおり、「こぎん刺し」を中心とした自社製品作成に力を入れています。

**賃金向上、雇用創成を  
目指し行動へ**

同事業所では、今まで針も握ったことがない、糸にも触れたことがない利用者さんが多いため、裁縫の基本を体験することができるようにもCWらぼならではの。

今回、日光下駄みやびを営む渡邊さんに声をかけたのは、日光下駄の職人が渡邊さんを入れて5名しかおらず、後継者